

実践報告

わが病院看護自慢

遠隔看護の探求

中出 みち代

石川県看護協会 青空ハウス実践リーダー

日時：2021年10月3日(日) 13:00~16:00

会場：金沢大学附属病院 宝ホール

参加者：医療機関の看護師8名、支援者7名

内容：1. 軽症者療養施設(通称 青空ハウス)の実態報告
2. 対面しない看護の体験『ロールプレイ』
3. ディスカッション(看護の探求)

看護は観察から始まる。過去の看護経験を通して、「観察ができない」「情報がほとんどない」という状況下で看護過程を展開したという経験は皆無であり、正に災害支援の際の看護と同様の体験をした。災害看護では、それでも観察は可能であったが、今回の未知のウイルスに対する非対面・非接触を条件として、看護師自らが感染しないということが県の軽症者の療養施設として病床の逼迫を回避する措置としての事業のミッションであった。遠隔看護と称しての模索が始まった。いくつもの感染拡大期を経た第5波が収束の兆しを見せた2021年10月3日、宝ホールを会場に遠隔看護を再現すべく、看護師役の参加者がアイマスクをして、ロールプレイを実施した。観察が遮断された声のみでのコミュニケーションを体験した。看護師役1名、患者役1名、観察者2名で4グループを編成し、1セッション15分を目途とし4ラウンド実施した。様々な関係性の体験をめざして、看護師役・観察者はその都度シャッフルして、新たな関係性の構築をめざし、可能な限り青空ハウスでの遠隔看護の臨場感を創出することとした。青空ハウスでの遠隔看護を経験した4名の看護師

が患者役、ファシリテーター、タイムキーパーを兼ねてロールプレイを実施した。実際の現場で体験した事象を事例として、患者役が4つのグループを移動して、様々な場面で、様々な出会いを意図的に作り出すようにした。グループごとに観察者も変え、できるだけ多面的で多様な意見を看護師役にフィードバックできるように工夫した。振り返りを効果的にするために、看護師役・観察者共にプロセスレコードを用いた。

事例は、以下のとおりであった。

1. 昼夜逆転している20代の患者からの深夜の電話
2. 発症日の違いを訴える患者
3. 生活を整えないで、薬を希望する患者
4. 規則正しい生活ができず、元々朝食は摂らないという患者
5. 抗体カクテル療法をしたが、今後のワクチン接種はどうすればよいかと質問する患者
6. 家族全員がコロナに罹患したと不安を訴える患者
7. 咳が出るので、鎮咳剤を希望する患者
8. 入所直後で、不安を訴える患者
9. 眠剤を飲まないとい眠れないと訴える患者

連絡先：中出 みち代

公益社団法人 石川県看護協会

〒920-0931 石川県金沢市兼六元町3-69

刻々と変化する新しい情報を看護師として把握することの必要性や薬物療法に頼りがちな患者への薬物の作用・副作用の説明、コロナに対する不安への対応など、専門職としての機能の発揮が求められる事例であった。

各セッションの短い振り返りの内容の概略は以下のとおりである。

1. 体調管理、まず聞くことの大切さ。
2. 気がかりをきちんと伝える。
3. 電話の第一印象、重要。
4. 少ない情報での看護判断の難しさ。
5. 単に励ますのではない。

4つのセッションを終えて、「日頃の看護と遠隔看護の共通点と相異」という視点で全体でのディスカッションを実施した。その内容の概略は、以下のとおりである。

1. まず聴く。押し付けでなく、提案という姿勢。
2. 患者参加型の看護の必要性。
3. 遠隔ならではの、寄り添うスキル。声のトーンやスピード。敏感な察知力。
4. 寄り添うだけでなく根拠に基づいた患者教育の大切さ—うがいの徹底や換気、食の大切さ、水の大切さ、運動の必要性など—
5. 実行可能な伝え方。

第5波までの経験を通し、変異を繰り返したウイルスの性質も少しずつ明らかとなり、ワクチン接種が浸透したこと、診療のガイドラインが刻々と改訂され抗ウイルス薬が保険適応となったことなど、コロナウイルス感染症を取り巻く環境も大きく変化を遂げてきた。無意味な恐怖心や過剰な

感染対策などが是正され、療養者の退所基準なども変更され、如何に基本的な看護が重要であるかという事が再確認できてきたころであった。

清潔・食事・環境調整・運動など生活過程を整えるという看護独自の機能が、コロナウイルス感染症をも凌駕するという実感が、生活指導に自信をもたらしてくれ、より具体的な伝え方の工夫が重要となっていった。伝えたのに、効果が出ず、できていないのは伝え方が悪いという事に他ならない。如何に、納得して行動化できるかが、観察による評価ができない、対面して指導の効果を評価するという事も出来ないという状況下においては、より重要であった。「うがいをしてください。」「運動をしてください。」「水分を摂ってください。」「深呼吸をしてください。」「腹臥位になってください。」このように伝えられた患者で正しく効果的にできている患者は稀であった。発達段階に応じて、理解度に応じて、如何に具体的で実施可能な伝え方であるかが、看護足りえるかの大切な点である。コミュニケーションしかない遠隔看護にとって重大なことであった。まして、多くの外国人への対応も経験した。IT機器を駆使して、同時通訳システムを駆使して伝えても、殆ど伝えられていなかったことが現実であった。イラストの葉を届けるなどの工夫も展開されていた。

未知の世界へ無知で突入した看護であったが、生活過程を整える看護独自の機能は、このコロナ禍において、その威力を発揮できたと実感できるようになった。

